〔第１５回日本言語文化学研究会発表要旨〕

『新御伽婢子』考

朴　蓮　淑

(1997・12・6 発表)

I　はじめに

『新御伽婢子』は浮世草子時代に入って間もない天和三年（1683）に刊行された怪異小説集である。この作品は井原西鶴の影に隠れて研究が殆ど成されず、ただ、序文に「都や遠い諸国から見聞したものを集めた」という作者の言葉があるためであろうか、作者の見聞談のものと大まかに見なされてきた。ところが、近年当麻晴仁氏が片仮名本『因果物語』との関連を考証し、新しい視点を打ち出し、研究は進みつつある。但し本書の全四十八話の中『因果物語』との関連説話は一部分であって、まだ解明されていない説話が多く残っている。私も巻二の「鴈塚昔」巻四の「梭尾螺」の二話を取り上げ、典拠を論じるとともに民話との関連を述べたことがある（お茶の水女子大学人間文化研究年報 21 号)。引き続き今回は巻六「明忍伝」巻二「髪切虫」について考えたいと思う。

II　巻六「明忍伝」

内容は京都の槙尾山の僧明忍の往生伝である。つまり①明忍は公卿の子孫であり、幼い頃から才能が勝れ三重韻などをよく諳んじていたこと、②兄が上に使える中難儀にあうことを見て厭世を感じ、高雄の晋海僧正に頼んで出家したこと、③高麗に渡る途中対馬で荒布という海産物を食べて泄瀉（胃腸病の一種）にかかり、それが悪化し、亡くなる。臨終の時、僧が太鼓の撥のような物で畳をたたきながら往生の念仏をしたところ、忽ち紫雲がたなびき、聖衆の来迎がある。その様子を書いた辞世を残し、目出度き往生を遂げたこと、そして最後に④明忍の死後、僧に伴って渡唐を計った浄人が辞世の記や撥を槙尾に持ち帰り、明忍の往生の有り様を語り、現在辞世や撥は霊宝として残っていることが述べられている。

当麻晴仁氏は本話の参考として『沙石集』巻第十末（三）「臨終目出度き人々ノ事」を挙げている（当麻晴仁「『新御伽婢子』考—片仮名本『因果物語』との関係—」『青山語文』２２号、平成４、３月)。そこでは高僧の臨終時の異香・光明・紫雲などの瑞相のあらわれが語られており、「明忍伝」と相応するところがある。しかしそれは一種の往生伝の類型であり、実際明忍について調べていくと、中世末期から江戸初期に実在した有名な律宗の僧であったらしい。現在明忍に関する管見の資料には『明忍律師之行状』（東京大学史料編纂所蔵影写本『西明寺文書』に収載)、『日本古今往生略伝』（天和三年刊)、『明忍律師行業曲記』（貞享四年成立、元禄十六年刊)、『東国高僧伝』（貞享五年刊)、『緇白往生伝』（元禄二年刊)、『律苑僧宝伝』（元禄二年刊）『本朝高僧伝』（元禄十五年自序）がある。ここでは写本の『明忍律師之行状』、刊行された各資

料間にそれほど内容の差が見られない点もあり、成立が早い『日本古今往生略伝』、『明忍律師行業曲記』を取り上げ、「明忍伝」との関連を述べたい。

「明忍伝」の①では明忍の出自及び幼少年時代について簡略に述べられている。これに該当する箇所の資料を参照すれば、明忍の出自や幼少時の行跡が極めて具体的に記されている。資料間の内容がほぼ一致するため、まとめて述べると次のようになる。明忍は天正四年に京都に生まれる。童名は久松、字は俊正、権大外記康綱の九代目の後裔、中原少内記康雄の次男である。初めの釈名は以白。七歳より高雄山の晋海僧正の所へ通い、内外典を学習する。十一歳で元服し、少内記に任ぜられ、兄がいたが、兄より才が優れていたため、家を継ぐ。『聚分韻略』（三重韻）を諳んじ、聯句執筆をよくし、神童と誉められた。家をよく保ち、十六歳で少外記、右少史に任ぜられた。以上の内容は具体的記述となっているが、『新御伽婢子』の伝えるものと骨格がほぼ同じである。

②はいわゆる出家についてである。『明忍律師之行状』では明忍の出家のきっかけとして、幼い時から晋海僧正の教化により世間の栄華執着を嫌っているうち、兄が金銭に絡む難儀で悲嘆している様子を見て厭世が増し、出家したことが大きく述べられている。兄のことが出家の原因となったということは『新御伽婢子』でも述べられているところである。『日本古今往生略伝』『明忍律師行業曲記』では公私の仕事の忙しい中、明忍の名声はどんどん高まる。高官位と名声の反面、明忍の内面では身の不実さが感じられ、しかも深く世間のあくせくの様子をも厭い、遁世したと語られている。ところで、ここで注意されるのは、この両者には、明忍の兄に関する記事がまったく見られないことである。この両方の資料からは身近な事柄や陳腐なところを省いた形で整理し明忍の行状を褒め称え伝えていることが窺われる。以上の明忍の出家に関する比較から『新御伽婢子』と『明忍律師之行状』との密接なつながりが見出される。

③は僧の対馬での最後についてである。これに該当する箇所の資料によると『新御伽婢子』の内容とほぼ一致している。ただ明忍の書き残した辞世に注意すれば、『新御伽婢子』には「此苦は暫の程あの聖衆の紫雲清涼雲の中に若まじはりたらば。いかほとの喜悦ぞや。絵に書たるは万分が一。八功徳の池には七宝の蓮花樹林には瑠璃の枝葉等也」、『明忍律師之行状』には「此苦はしはらくの事あの聖衆の紫雲清涼雲の中に若ましはりたるはいか程か喜悦そや。絵に書たるは万分か一八功徳の池には七宝の蓮華樹林には琉璃の枝葉等也」、『日本古今往生略伝』には「此ノ苦ハ須臾之事此ノ清涼雲中ノ交ラハ彼ノ聖衆ニ幾許（イクノハクノ）樂（ミソヤ）哉」、『明忍律師行業曲記』には「我カ此ノ病苦ハ須臾ノ之事ナリ彼ノ清涼雲ノ中ニ與（ト）諸ノ聖衆相交ラハ則豈ニ不（スヤ）大ナル快

樂_哉八功徳水七宝蓮池是レ我カ所歸ント也」とそれぞれ記されている。一見して後者の二資料においては辞世の意味に変化がないものの、語句の異同が目立つ。一方『明忍律師之行状』の辞世は『新御伽婢子』と殆ど一致している。まるで一方が一方を見て書き写したかのようである。このところでも両者間の密接さが見受けられる。

④では明忍の死後、浄人による明忍の不思議な往生談やその遺品の伝来が記されている。これは各資料が伝えているところである。

以上のことから『日本古今往生略伝』『明忍律師行業曲記』が身近な事柄や陳腐なところが省かれている形で整理されて明忍の行状を伝えているのに対して、『明忍律師之行状』はかなり細かく伝えていることがわかる。そして②③の考察により『明忍律師之行状』は明忍伝記を伝える他の資料より最も『新御伽婢子』と近似している。従って『明忍律師之行状』は最も明忍伝記の事実に近く、このような内容を持つものが明忍死後、当時に伝えられており、『新御伽婢子』の作者は『明忍律師之行状』、或はそれに似たようなものに接するチャンスを持ったと推測される。

Ⅲ 巻二「髪切虫」

同じ屋敷の二人の侍が日を置いて夜中、或いは日中の往来で忽然と髪が切られる怪異の話である。そして、二人の侍の奇異な経験の実例を挙げたが、それでも読者は侍に起こった出来事であってみれば、非権力の者の恨みによる仕業とも考える可能性があるという作者の意図があったのか、話の最後に同じ頃町人にも同様な出来事があり、世の中に正体不明の髪切虫が飛行し、髪を食らう噂が立っていることが評の形で加えられている。

この話の素材が当時の髪切虫怪異の風説によるということは前掲の当麻晴仁氏の論文に指摘されている。ただそこに挙げられている資料は『新御伽婢子』よりかなり後に出された『摂陽奇観』のみであって、『新御伽婢子』執筆の前後あたりにおける髪切虫怪異の流行の様子が明らかになっていない。以下資料を通してそれについて述べたい。

髪切虫怪事の風説がいつ頃から始まったかは定かではないが、『大乗院寺社雑事記』尋尊大僧正記二の康正三年三月二十一日の条に、室町殿御所に髪切の怪事があったという噂の記事が書かれている。このことから風説は既に中世の康正頃にはあったようである。その後噂は絶え間なく伝えられたのか、近世に入って『宝蔵』によると、寛永十四・五年頃、髪切虫の怪事があったという噂があり、それは日々が重なるにつれ大いに人口に膾炙していた。女性達は自分の髪が切られるのではないかという不安で、和歌を書いた守り札を門口に貼ったり簪に纏ったりし、又髪切虫

は炒鍋の下などに隠れているということで、炒鍋を門前に投げ打ったりして通行に不便のあったことが書かれている。髪切虫の風説で当時世間が騒いでいた様子を伺うことができる。『宝蔵』よりやや時代が下がって成立した『朝野雑載』では、延宝五年の夏と元禄の初め頃にあった髪切虫怪事のことを具体的実例を通じて語られている。『大乗院寺社雑事記』ではどこに怪事があったという簡単な記事のみが記録されており、『朝野雑載』では怪事自体の実態より怪事の噂の流行に伴う世の中の風俗の様子を書くことに力が入れられている。ところが、ここでは説話の形式で怪事自体の実態が記されている。このことからこの時点に至っては既に髪切虫の怪事は怪談の一つとして定着していたようである。『宝蔵』『朝野雑載』両作品は丁度『新御伽婢子』刊行の前後に成立したものであって、その記事は注目に値する。その後髪切虫の怪異に関する記事は『後見草』『半日閑話』『耳袋』『中陵漫録』など多くの文献に見られ、その怪異性がエスカレートしている。

以上で髪切虫怪異に対する風説は既に中世に存在しており、近世に入ってはそれがいかほど流行したか、また近世の人々がそれにいかに興味をもっていたかということを知ることができる。髪切虫怪異は近世文学によい素材提供のものとなったわけである。本題の『新御伽婢子』「髪切虫」はこのような世間話から素材を得たものと考えられ、作者は単なる世間話の髪切虫怪異を文芸に昇華させたと言うことができよう。

四 おわりに

『新御伽婢子』は題名から見て仮名草子『伽婢子』（寛文六年刊）を意識して著したものである。しかし『伽婢子』が中国の怪異小説の翻案であるのに対して、これは上に考察してきた二話からわかるように日本各地の奇怪異談を集めたものである。作者は奇怪異の素材を身辺の珍談奇談、或は『因果物語』などの文献から得ている。文献からであってもできるだけ現に巷間に密着したものを求めた。従ってそれには『伽婢子』のような幻想夢幻的怪異性は多少欠けているものの、実際に経験できそうな怪異の戦慄が感じられ、緊迫感が漂っている。『新御伽婢子』は『雨月物語』への影響も見られるが、おそらく秋成はそうした現実的怪異性に惹かれたのかもしれない。

（お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻）